

花だけでなく鳥も沢山庭に来る！！

鶇(つぐみ)、鶇(ひよ)、花鳥(アトリ)、椋鳥(むくどり)、
四十雀(シジュウカラ)、他に土鳩、雀、鳥も来る。



鶇(つぐみ)：シベリアから日本へ晩秋に飛来し、田畑で胸の斑点模様を隠しながら地上を跳ねて餌を探す、ヒタキ科の代表的な冬の渡り鳥で、体長は24cm。スズメより大きくヒヨドリほどの大きさで、茶褐色と白の斑模様が特徴。地面を跳ねるように歩き、胸を張って立ち止まる姿がよく見られ、「クワッ」と鳴きます。日本へ渡って来た際、ほとんど鳴かずに「口をつぐんで(閉じて)」いるように見えたことから「ツグミ」と名付けられたという説が最も有力です。春になって帰る前にはさえずるため、その対比から名付けられました。

鶇(ひよどり)：日本全国の街中や山林で一年中見られる、全長約28cmの灰色をしたスズメ目ヒヨドリ科の野鳥です。頭の毛がボサボサで頬が赤褐色なのが特徴で、果実や花の蜜を好み、食いしん坊で「ピーヨ、ピーヨ」と大声で鳴く、非常に身近な鳥として知られています。主にその「ヒーヨ、ヒーヨ」という甲高い鳴き声から転じたという説が有力です。また、古名の「ヒエドリ(稗鳥)」が転じたという説や、冬に山から下りてくる際に鳴く様子から名付けられたとも言われています。

棕鳥(むくどり)：全長約24cmでスズメより大きくハトより小さい、オレンジ色のくちばしと足が特徴的な留鳥です。日本全国の農地や都市部に生息し、雑食性で昆虫や木の実を食べます。夕方になると数千～数万羽の大群で街路樹などに集まる習性があり、鳴き声(ピロロ・ピロロ)や糞による騒音・衛生被害が問題視されることもある、身近な野鳥です。名前の由来は、主にムクノキ(棕木)の実を好んで食べる様子から名付けられたという説が有力です。その他にも、大群で行動する習性から「群木鳥(むれきどり)」が転じた説や、江戸時代に田舎からの出稼ぎ者を指した言葉など、複数の由来や背景が存在します

花鶏(アトリ)：スズメ目アトリ科の冬鳥で、アトリ(花鶏)は、スズメ目アトリ科の冬鳥で、全長約16cm。オスは夏羽になると頭から背が黒く、喉から胸にかけて鮮やかなオレンジ色になる。冬は雌雄とも全体的に茶色味を帯びるが、腰の白い羽は目立つ。尾はM字型に切れるユーラシア大陸北部で繁殖し、日本には10月頃に数百～数万羽の巨大な群れで飛来する。オレンジ色の胸と黒い頭部が特徴(夏羽)で、冬は農耕地や林で草木の種子を食べる。かつては集団行動から「集鳥(あつとり)」と呼ばれた。ユーラシア大陸北部で繁殖し、日本には10月頃に数百～数万羽の巨大な群れで飛来する。かつては集団行動から「集鳥(あつとり)」と呼ばれた。また、オスは冬に頭が黒く、胸がオレンジ色(橙色)に鮮やかに色づき、その様子が花が咲いたように見えたことから「花鶏」という字が当てられたとも言われています。